

---

# 見下ろす鏡

暁さくや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

見下ろす鏡

### 【著者名】

暁やくや

N3200D

### 【あらすじ】

田覚めると、鏡の中に私でない私があった。私が私に襲いかかった時、仮面は剥がされる

(前書き)

この小説はホラーです。苦手な方は「注意ください」。

田覚めは最悪だった。

陽の光が目に眩しい。東向きのワンルームマンションには、陽の光が煌々と差し込んでいた。

体にはじつと汗をかき、軽い頭痛がする。

彩夏は緩慢な動作でソファーから身を起こした。軽い眩暈まする。右手で額を覆つてうつむくと、長い髪が乱れて頬に巻きついてきた。

こんな田覚めは初めてだ。かといって、何か悪夢を見た記憶もない。

疲れてるんだわ……。

志望大学に合格して郷里をあとにし、一人で暮らしあじめて一ヶ月。

規模の大きな有名大学、アルバイト、一人きりの食卓。何もかもが初めての体験で、確かに毎日のように神経を張り詰めて今日まできた。

部屋の中は、ベッドと一人掛けのソファー、小さなテーブル、テレビとパソコン、それだけでいっぱいだ。大学生になつたのだから化粧もしなくちゃね、と、姉が合格祝いにくれた鏡を壁にかけてあるだけで、まだ、飾り気がなく殺風景だった。

壁掛けの鏡は、花と薔薇を緻密に彫りこんだ枠に囲まれた橢円形の見事なものだ。

彩夏は乱れた髪を撫で付けながら、立ち上がって鏡を覗き込んだ。鏡には、彩夏がいる。

眩しい朝日を背に受けて、彩夏の顔には影ができていた。

不思議な違和感があつた。

見ている者は確かに自分なのに、自分ではないと思える。二つの似通つた絵を並べて、間違い探しでもしている気分だった。

彩夏はそつと、鏡に手を伸ばしかけた。

と、その時、鏡の中にいる彩夏の唇が動いた。笑つたと表現できるほどではない。彩夏と同じ薄い桜色の唇が、浅い角度で上向きに持ち上がったのだ。

鏡に触れる寸前で、彩夏は手を止めた。

わたしは笑つてない。

思つた途端、鏡に映つてゐるモノがゆっくりとした動作でうつむいた。黒々とした長い髪が頭の動きに合わせて前に垂れ、頭頂部分が見えてくる。うつむいているはずなのに、目だけは決して視線をはずさずにじっと彩夏を見ている。黒目が上目蓋に張り付くように固定され、白目田の部分が妙に目立ち、冷徹に彩夏を睨みあげていた。彩夏は小さく悲鳴をあげ、後ずさつた。慌てて足を引いたので、テーブルの角にぶつかる。

それでも、鏡から目を離せなかつた。

夢を見ているのかもしれない。

彩夏は慌てて時計を探した。目覚まし時計はベッドの上においているはずだった。本当はまだ夜中で、自分は眠つてゐるに違いない。そう考えて、彩夏はベッドのほうへと身体ごと向きを変えた。

刹那、腕に氷塊のように冷たいものが触れてきた。慌てて手を引つ込めると、無数の黒い糸のよつたなものが巻きついている。髪の毛だ。

「マテ、どこへゆく……」

耳の奥を撫で上げられたかのような、おどろおどろしい声が聞こえてきた。全身の毛がすべて逆立つたかと思つほど、低くて冷たい声だつた。

動けなかつた。声も出なかつた。身体の芯に冷やりとしたものが突き立つた。

腕に巻きついた髪の毛の先は、壁のほうに向かつている。

彩夏は目が乾燥して零れ落ちるのではないかと思うほど見開いた。硬直した身体はそのままに、視線を移動させた先に、鏡がある。

「かえせ……」

いつの間にか、鏡の中にいたはずのもう一人の彩夏が、目の前に立っていた。

顔にも身体にも丸みがあつて存在感がある。幽靈には見えない。それが何故、自分と同じ姿であるのか、彩夏には全く分からなかつた。

「かえせ……」

もう一人の自分が、同じ台詞を何度も繰り返す。腕に巻きついた髪の毛が、次第に絞まつてきた。指先の感覚がなくなつていく。鏡の中にいた女が、腕に巻きついていた髪を片手で握り締めた。それを引く。そうすると、彩夏も女の方に引き寄せられた。

「嫌よ！」

彩夏は絶叫して腕を振りほどいた。勢い余つて尻餅をついたが、そのまま這つて玄関のほうへ逃げる。ワンルームなので、部屋を出ると簡易キッチンとバスとトイレしかない。

振り向かずに這つた。立ち上ることはできなかつた。

人の助けを呼ぶ、などという考えもおこらなかつた。ただ、目の前の「自分」から逃げることしか頭になかつた。

「かえせ……」

どこかくぐもつた声が背に迫る。あと一歩で玄関先というところまで這つてきた。

けれど突然、髪を引っ張られて、痛みに体制が崩れる。絶叫した彩夏は、そのまま後ろに引きずり戻された。

髪がすべて抜けるのではないかというほどの痛みが、彩夏の頭を襲つた。

見上げると、女の顔があつた。

大きく見開いた目は生々しく黒く、彩夏と同じ色白の肌には艶がある。桜色の唇が、ひどく潤つて見えた。けれど、表情がなかつた。ただ、彩夏の髪を握り締め、淡々と下ろしている。

「嫌つたら、嫌よ！」

両手で頭をおさえて叫び声を上げたが、あたりは静かで物音一つしない。

「かえせ……」

女は同じ言葉を繰り返してきた。

何故だか、彩夏の心に怒りがわきだしてきた。血が、沸き立つたかと思った。抑え切れないほどの激しい情動が彩夏を突き動かした。ドクリ、と、鼓動が一つ耳打つた。

彩夏は握り締められていた自分の髪を握り返した。それを思いつきり引っ張る。

もう一人の自分が、彩夏の力技に負けでよろめいた。すかさず相手の腕をつかんで、さらに引いた。

彩夏と、鏡の中の彩夏がもつれるように倒れこむ。

半分、身体の上に乗るようにして倒れてきたもう一人の自分を足で押しのけると、彩夏は馬乗りになつて女の首に手をかけた。

鏡の中にいた女が首に巻きついた手を解こうと爪を立ててくる。痛みに負けずに、彩夏は手に力を込めた。

もう一人の自分が、小さく呻き声を上げて、白目をむく。

「か……え、せ……」

「嫌よ」

彩夏の口元に鮮やかな笑みが張り付いた。

細められた目は蔑むように女を見下し、顎を心持上げて、鼻でせせら笑つた。

「返しゃしないわよ」

首を絞められたもう一人の彩夏は小さく痙攣し、身体が徐々に透けだした。唇は青紫色に変化し、顔はつゝ血でじす黒く変化した。

「本性を……あ、らわ、したな……」

女のしわがれた声を聞いて、彩夏はさらに手に力を込めた。パツン……

シャボン玉がはじけたほどの、小さな衝撃が起こつた。

同時に、鏡の中から出てきたもう一人の自分が、消えた。

ワンルームの部屋には、どっぷり汗をかいた彩夏が、また一人きりになつた。

ベッドの方向から、田覚まし時計の秒針の音が聞こえてくる。窓から差し込んでいたはずの眩しい光が、テレビのチャンネルを切り替えたように消え去つた。

漆黒の闇に、部屋は包まれた。

彩夏はゆつくりと立ち上がり、鏡を振り返つた。  
そこに、もう一人の自分が、まるで薄い影のような姿で映つている。

「面倒かけないでくれる?」

腕を組んで、小首を傾げると、彩夏は小さく舌打ちした。

鏡の中で、彩夏が涙を流す。

「つざいわ。消えてちょうどいい。あんたを見るとね、反吐が出んのよ」

眉を寄せて鬼神のじとき形相で彩夏が叫んだ。ひと睨みして、鏡の中から彩夏の姿が消えたことを確認すると、ため息をついて座り込んだ。

テーブルに置いていた化粧箱の中から櫛を取り出して、乱れた髪をすいていく。

丁寧に、頭の上からゆつくり、ゆつくりと櫛を下ろしてゆく。

彩夏は満悦したように微笑んだ。

「渡しゃしないわ。これは私の体よ……」

再びベッドに横になつた彩夏を、鏡の中の彩夏が見下ろしていた。

「いつか、その仮面を剥いで、私に戻つてみせる……」

鬼のような女も、

春のような女も、

どつちも私じゃない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3200d/>

---

見下ろす鏡

2010年10月10日03時25分発行